

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	山根 美奈
論文題目	現代のイタリアの移民 ——受容と拒絶のパラドックス——		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、現代イタリアが抱える移民——とりわけ不法移民——を取り巻くさまざまな問題を、政治・外交、司法、労働、文化・芸術といった複数の観点からあぶり出し、多面的に考察するもので、「はじめに」と「おわりに」には含まれる以下の四つの章からなる。すなわち、第一章「移民の入り口としてのランペドゥーサ島」、第二章「移民と法律」、第三章「移民と労働——イタリア経済と労働力需要」、そして第四章「移民と文化」、である。</p> <p>まず第一章では、シチリア島の南に位置するイタリア最南端のランペドゥーサ島に焦点を当て、面積わずか20平方キロメートルのこの孤島が、とりわけアフリカからの不法移民の入り口となってきた経緯と現状を考察する。「地中海中央ルート」とも呼ばれるこの島が、とりわけ1969年のリビアにおける軍事クーデター以後、イタリアのみならずフランスやドイツなどを目指すアフリカ諸国からの移民の玄関口となり、現在に至るまでその数が増加し続けていることが明らかにされる。危険な航海と相次ぐ遭難事故、密航業者の存在、強制収容、上陸者の選別と本国への強制送還、仏独による冷淡な対応など、命がけでこの孤島を目指して押し寄せる移民をめぐる深刻にして困難な問題点が浮き彫りにされていく。</p> <p>つづく第二章において、こうした状況にたいしてイタリア政府がいかなる法的手段に訴えてきたかがたどられる。具体的には、1986年の外国人雇用規定、1990年のマルテッリ法、1995年のディーニ立法令、1998年のトゥルコ・ナポリターノ法、そして2002年のボッシ・フィーニ法などである。これらを通して、EU圏外の市民の入国と滞在に関する規制、外国人労働者の計画的な受け入れ、不法滞在者の救済と追放などの事項が整えられていくが、そこには常に、寛容主義と排他主義の二面性が隠されていることが指摘される。ボッシ・フィーニ法では、領海に侵入した船舶はことごとく連行するという極めて厳しい決定がなされるが、そのことがかえって不法上陸者たちを増加させてしまうという、逆説的な結果を招いたという鋭い分析はたいへん興味深い。</p> <p>さらに第三章では、少子化のイタリアにおいて、移民の労働力が不可避免的に求められてきたという現状が、統計等を交えながら、具体的かつ客観的に分析されていく。とりわけ、伝統的に中小企業に特徴のあるイタリアの地域産業構造が、「地下経済」あるいは「経済の非公式分野」、つまり多国籍外国人による闇労働——多くはいわゆる3K——を加速させてきた点が明らかにされる。加えて、家庭内労働者である家政婦に、同じカトリックの</p>			

国フィリピンからの移民が多いという指摘もなされる。またとりわけ21世紀に入ると、移民が積極的に新たに起業していく事例が著しく増大していくことも跡付けられる。たとえば2016年には、移民の経営する中小の企業は60万社にもものぼるといふ。闇労働であれ企業家であれ、彼らの目的が本国への送金にあるという事実も、具体的な数字や送金経路を踏まえたうえで明らかにされている。

最後に第四章では、移民を描いた映画と、移民たちによる文学作品の創造が考察の対象となる。1990年から2015年までの25年間に移民をテーマにする劇映画とドキュメンタリー映画は450本を超えるというが、そのなかから『プンマロ』（1990年）や『カバー・ボーイ』（2008年）、『海と大陸』（2011年）などの主要作品を詳細に分析することで、移民の表象がむしろイタリア社会を逆照射していることを明らかにしていく。移民映画はほとんどがイタリア人監督によるものであるが、つづいて取り上げられる文学は、移民によって書かれたものである。なかでも本論文が注目するのは、「四本の手」と呼ばれる作品、つまり、移民の手になる文章に、イタリア人のジャーナリストたちが手を加えた小説や詩の存在である。移民の国籍ないし母国語、教育の程度、イタリア語の習得度等におのずと差はあるが、その多様性は読者層にむしろ歓迎されている点も指摘されている。さらに、移民のための文学コンクール「エクセトラ賞」が、この文学ジャンルが広くイタリアで認知されるきっかけとなったことが明らかにされる。無視され差別されてきたサバルタンとしての移民たちは、たとえ母国語ではないとしても、今やみずからの言葉でみずからを語ることで、見えない存在から脱却を遂げつつあるのである。

以上のように本論文は、イタリアにおける移民の実態と問題点を包括的に論じた、本邦で初の成果であるといっても過言ではない。

(論文審査の結果の要旨)

現代イタリアの移民問題をテーマにした本論文は、とりわけ以下の二点においてその独自性が高く評価される。まず第一に、このきわめて現代的なテーマにアプローチするにあたり、政治と外交、司法と労働といった社会的観点からばかりではなくて、映画や文学といった文化的・芸術的な観点をも射程に入れることで、いわば総合的にとらえようと試みている点である。しかも、ドイツやフランスにおける移民問題についての先行研究は少なくないが、イタリアに関してこのように包括的なかたちで問題を論じたものは、管見の限り、本論文が日本語で最初といっても過言ではないように思われる。次に、この大きなテーマに取り組む方法として、イタリア語の一次文献や関連の先行研究、統計学的な資料等を的確に踏まえているのはもちろんのこと、みずからの足と目で現地調査を重ねていることが挙げられる。

本文は次の四つの章、すなわち順に、第一章「移民の入り口としてのランペドゥーサ島」、第二章「移民と法律」、第三章「移民と労働——イタリア経済と労働力需要」、第四章「移民と文化」からなる。アフリカ各国から命がけで地中海を渡ってくる多くの移民たちのニュースは、日本でも報道されることがあるが、その入り口となっているのが、シチリア島の南に浮かぶ面積20平方キロメートルの小さな孤島ランペドゥーサ島である。その歴史と現状を丹念にたどった第一章は、この島がイタリアのみならずEU各国の移民問題にとっていかに重要かつ深刻なトピクとなっているかを、くつきりと浮かび上がらせている。

こうした現状にたいしてイタリア政府がいかなる法的処置を講じてきたのか、第二章ではこの問題を具体的に、1986年の外国人雇用規定、1990年のマルテッリ法、1995年のディーニ立法令、1998年のトゥルコ・ナポリターノ法、そして2002年のボッシ・フィーニ法等の分析を通して検証していく。ここから明らかになるのは、本論文のサブタイトルにもあるような「受容と拒絶のパラドックス」である。つまり、イタリア政府の側は、歴代の各政権によって若干の違いはあるものの、基本的に寛容主義と排他主義という、相反する二つの顔を巧みに操ることで、問題に対処してきたというわけである。

このことは、つづく第三章のテーマとも関連している。すなわち、伝統的に中小企業に特徴のあるイタリアの産業構造において、少子化がますます進行するなか、とりわけ3Kと呼びならわされる労働力として、必然的に移民が要請されているという現状である。この問題にたいして本論文は、イタリアの関連諸機関の資

料や統計、日刊紙の記事等の詳細な分析を通じて客観的にアプローチしていく。さらに、同じカトリックの国としてフィリピンから、多くの移民がイタリアの家庭内労働として入っていること、21世紀になると移民たちが積極的に起業し、イタリア経済の一翼を担っていることなど、興味深い事実も明らかにされていく。

先述のように、こうした政治的・社会的な側面ばかりではなく、文化や芸術の側面からも移民問題を考察する点に本論文の大きな独自性があるが、これを扱っているのが最後の第四章である。というのも、移民とイタリア人の錯綜した関係性、さらにはイタリア社会における移民の実態は、芸術作品のなかに深く刻印されているからである。主たる対象となるのは、イタリア人監督によって製作された移民の劇映画やドキュメンタリー映画、そして移民の作家による文学作品である。1990年から2015年までの25年間に関連の映画は450本も製作されているというが、そのなかから、とりわけ移民を描くことでイタリア社会を逆照射している数本の作品を詳細に分析している。こうした潮流のきっかけのひとつになっているのが、1989年にナポリで実際に起こった事件、南アフリカからの難民ジェリー・エッサン・マスローの虐殺だったという指摘も、説得力がある。

さらに移民文学に関する以下の三つの論点も、本邦ではじめて取り上げられたものである。まず、「四本の手」によって書かれたと呼びならわされる作品群、すなわち移民とイタリア人による共作の存在が第一点目。次に、この種の文学ジャンルが広く認知されるきっかけとなった移民文学賞「エトセトラ賞」の功績、最後に母国語とイタリア語、さらにEU共通語の英語などのあいだで揺れる多言語主義によって、新しい文学の可能性が生まれているという指摘、である。この観点から、ソマリア人移民二世の女流作家イジアバ・シェーゴの文学作品が採り上げられ、丹念な分析が試みられている。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年11月1日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降